

(社) 東洋音楽学会関西支部
支部だより

第18号 (1994-1-20)
Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のご案内

(社) 東洋音楽学会関西支部 第167回定例研究会

日時 1994年2月12日(土) 14:30-16:45

会場 大阪国際交流センター 会議室C(2F)
大阪市天王寺区上本町8丁目2-6 ☎06-772-5931

会場へのアクセス

- ①「谷町9丁目」駅(谷町線・千日前線)③番、⑤番出口から徒歩10分。
- ②「四天王寺前」駅(谷町線)①番、②番出口から徒歩10分。
- ③「上本町」駅(近鉄)から徒歩5分。

【連続講座】<音の今昔>14:30-15:30

「ナショナルリズムからモラヴィア・エスニシティへ
—チェコ芸術音楽にみるフォークロア受容の動向—」
内藤 久子(四天王寺国際仏教大学)

(休憩)15:30-15:45

【研究発表】 15:45-16:45

「江戸時代末期の雅楽演奏の実態について」
南谷 美保(四天王寺国際仏教大学)

司会:小西潤子 会場:田中伸子

◆例会終了後、懇親会を行います。是非ご参加ください。(会場他、4P参照)

(社) 東洋音楽学会関西支部 第168回定例研究会

日時 1994年4月16日(土) 14:00-16:15

会場 国立民族学博物館 第3セミナー室(2F)
吹田市千里万博公園10-1 ☎06-876-2151

会場へのアクセス

- ①「千里中央」駅(北大阪急行)または「南茨木」駅(阪急)にて、モノレール乗換「万博記念公園」下車徒歩15分(自然文化園通過に150円必要)。
- ②「茨木」駅(JR)より阪急バスまたは近鉄バス「エキスポランド行き」にて「日本庭園」下車徒歩15分(バスは1時間に2本のみ)。

*建物北側の職員通用口から、東洋音楽学会会員であることを告げてお入り下さい。正面からお入りになりますと入館料が必要となります。

【連続講座】<音の今昔>14:00-15:00

「アラブ社会の音と人(仮題)」 栗倉 宏子(中京大学)

(休憩)15:00-15:15

【研究発表】 15:15-16:15

「パキスタン北部周辺地域バルティスタンの音楽」 岡田 千歳
(桃山学院大学教育研究所)

司会:大東純子 会場:中原ゆかり

これまで沖縄音楽の研究は、琉球音階（あるいは沖縄音階とも呼ばれる音階）の解釈をめぐる議論を中心とするものであったが、それが大きなトレンドとして今日まで続いている観がある。沖縄音楽の旋律を六種の旋法に分類し、沖縄の音階の独自性を主張する研究者がいた。沖縄音楽の旋律をテトラコルドという枠で捉え、日本音楽の文脈の中で沖縄の音階を説明しようとする研究者もいた。また、新たにテトラコルドからなる琉球音階とは別にペンタコルドを枠とする別種の琉球音階の存在を主張する研究者がいる。

それらの主張の殆どが、音階や旋法といった概念を支えとし、それが沖縄音楽の分類、分析に適当であるか否かの議論を経ずに使用している。つまり、その概念は分析に適した道具でしかなく、徹底的な調査、研究によって沖縄音楽の無意識の中に発見されたモデルではないのである。したがって、そうした音階論は常に数量的なスケール（割合）や統計的なモード（最頻値）で音楽を語り、その分析の正当性、妥当性を示そうとする。だが、現実の沖縄音楽の生産において音階や旋法などの概念が機能していなかったとしたら、そのような音階論そのものが成り立たなくなり、琉球音階をめぐる主張は全て意味を持たなくなってしまう。琉球音階の探求は、そうした危うい認識の上に成り立っている。それ故に琉球音階は「幻」と成る可能性を秘めており、ロマンに満ちているのかもしれない。

以上のような沖縄音楽研究の現状を踏まえ、我々は何を批判し、何を再認識すべきか検討しなければならない。今日の自然諸科学や社会諸科学を構成する現代的な「科学的認識」が何たるかを知り、沖縄音楽をめぐる議論を新たな方向へと展開すること。我々は、今やその出発点に立っているのではないだろうか。

音楽におけるチェコ・ナショナリズムの現象は、19世紀後半のボヘミア楽派らによる「国民楽派」の活躍を経て、その後周縁のモラヴィア文化が見直されてくる中で、次第に「地域主義」の性格を強めていった。こうした動きは元来チェコの民俗文化が、西洋的なボヘミア文化圏と東方の純スラヴ的なモラヴィア文化圏の2つに大きく区分されることによるものであった。この両地域の民俗文化を基盤として、中世の時代より徐々に成熟していったチェコ人の民族意識は、18世紀後半にドイツの哲学者J. G. ヘルダーの思想に刺激されて国民音楽の樹立を促した。こうして近代のチェコ音楽は、2つの方向、つまり中央ボヘミアの要業に依拠しながら西欧の新ロマン主義を標榜したスメタナの音楽と、モラヴィアやスラヴ起源にまで及ぶ汎スラヴ主義的な表現を投じたドウォルジャークの音楽によって達せられたのである。しかし20世紀初頭になって自国でスメタナの声望がより高まるにつれ、モラヴィア出身のヤナーチェクは、スメタナのボヘミア的志向がモラヴィアの民俗性や汎スラヴ主義の理想を脅かすものであるとの危機感を強め、西洋文化の影響がむしろ希薄な東モラヴィア民謡の語法を創作の新しい構成次元に組み込むことによって、現代チェコ音楽の再編を実現しようとした。この「モラヴィア・フォークロリズム（モラヴィア民俗主義）」の現象は、1920年以降になると前衛の技法と結びついて、アロイス・ハーバ（1893-1973）らのもとで「微分音音楽」の創作を生み、今日の前衛音楽を主導する道を開くものとなっていった。

今回の発表では、とくにチェコの作曲家がどのような意識をもって地域の民謡等を芸術音楽に享受していったのかを見て行くことで、19世紀の「国民楽派」から20世紀の「モラヴィア・フォークロリズム」の音楽への動向を、チェコ芸術音楽におけるナショナリズムの質的変容（つまりエスニシティへの移行）として跡づける。

研究ノ一木

「常打ち舞台の魅力——宝塚歌劇」

横田 盤

おとし、西洋音楽受容史の研究だと称して宝塚歌劇を見はじめた。宝塚大劇場での各公演を4組すべて一度は見ようという初期計画は大幅に狂い、公演が気に入ると繰り返しかけ、ついには東京宝塚劇場までおいかけ見るようになってしまった(^_^)。そこで得られる高揚は、幼稚園の時から音楽演奏の訓練を受けてきた中では得られなかった種類のものだ。

宝塚歌劇は、宝塚の大劇場で水曜日の定休をのぞいてほぼ毎日公演し、4組持ち回りで2順する。そのうち7つが東京宝塚劇場へ移動して1ヶ月公演する。ほかにも地方公演や小さい劇場の公演を含めると、年間公演数は1000公演以上、のべ観劇者数は250万人は越えている。

舞台の情報量は、いちどで見るには多すぎる。そして、それらは日々変化する。うまくもなるし、アドリブもある。失敗もする。そこでは演技者がく今ここで生きていること>なのだ。公演の中盤で、7年目までの出演者のみで同じ演目を公演する「新人公演」も大きな楽しみのひとつだ。日頃わき役に甘んじている人たちが、そこで学び、本公演のあとで夜遅くまで練習し、みずから考えて身につけた大きな役に挑戦する。その成長を見る喜びもあるし、それを客席からみていた先輩(上級生)が、そこから感化されて、後半の舞台が変化していく。

公演中の演技の変化・前回公演からの変化・再演ならば初演の時の役者との違い・新人公演との差異・それらの連続性の中に舞台は成立している。予備知識無しの観劇でもそれなりに楽しめるのだが、数多くの公演回数を重ねることによって、歴史がつくられる。その中にわたしがいる・・・ような気がしてうれしい(^_^)。ミーハーに通い続けながらも、その心理を学問的に考えなきゃと思っています。

大会報告

「沖縄支部発足記念大会」雑感

櫻井 哲男

会員の多くの方が御存じのように、これまで東洋音楽学会は本部(東京)プラス関西支部という(ある意味では変則的な)体制で運営してきましたが、今年度から沖縄支部が加わり、2支部体制となりました。

12月3日から5日まで沖縄県立芸術大学を主会場として持たれた第44回大会は、この沖縄支部発足を記念する意味合いを帯びていました。支部ができるまでに尽力した人々や大会運営関係者に対する謝辞は、学会の公的な機関誌等でしかるべき方がなさることでしょうから、ここでは大会全体から受けた、個人的独断的な印象だけお伝えしましょう。

同時進行の会場もあったので全部聞けたわけではないのですが、研究発表は総じて非常にハイレベル、というわけにはいかなかったようです。けれども初日の夜に設けられた沖縄芸能の鑑賞会や、最終日の公開講演会およびシンポジウムの中には、いろいろな意味で光るものがあり、大会に彩りを添えました。

何ととっても大会全体を沖縄音楽および南西諸島音楽という一本の太い糸が貫いているという印象を与えたのは成功です。変な言い方かも知れませんが、南日本音楽研究者の同窓会といった趣があったのです。それも沖縄的に、あくまでおおらかで暖かい・・・。

沖縄という地域の持つ強い個性のゆえでもありましょうが、地方大会でしか味わえない独特のアロマが、しばしの間、憂き世を忘れさせてくれたのでありました。

懇親会のお知らせ

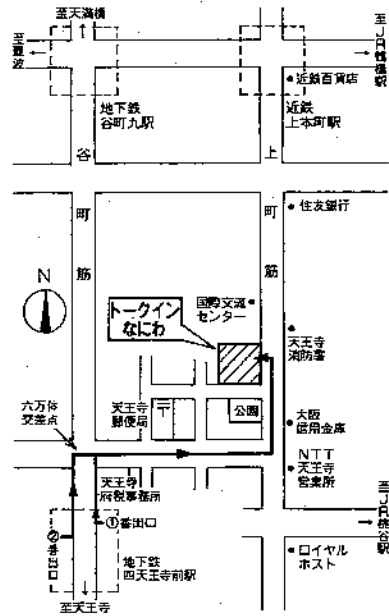
と き 2月12日(土)
17:30~19:00

ところ 天王寺区上本町 8-7-4
トークインなにわ
宴会場(鍋もの)
☎ 06-775-1133
<例会会場より徒歩5分>

会 費 3500円+飲み物代

懇親会申し込み先

小西潤子



定例研究会開催予定

- 第169回 1994年6月11日 大阪芸術大学
- 第170回 1994年9月 (会場未定)
- 第171回 1994年11月 (会場未定)
- 第172回 1995年2月 (会場未定)

定例研究会の発表の公募

定例研究会の発表を随時募集しています。第169回(6月11日)の申し込み締め切りは、4月末日です。氏名、所属、連絡先、希望月、発表テーマ、使用希望機器を明記の上、下記宛て送付ください。なお、申し込み多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともありますのであらかじめご了承ください。

定例研究会の期間合わせ

〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学 水野信男
 ☎ 0795-44-1101 (内線 521)
 Fax. 0795-44-0669 (水野宛と明記)

〒860 熊本市黒髪2-40-1 熊本大学文学部地域科学科 櫻井哲男
 ☎ 096-344-2111 (内線2469)
 Fax. 096-366-6957 (宿舎)

住所変更等連絡先

〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付
 (社)東洋音楽学会関西支部
 *住所変更等は、葉書にてご連絡をお願いいたします。

◆第168回定例研究会における【連続講座】<音の今昔>の要旨は、栗倉宏子氏の都合により、次号に掲載させていただきます。

発行：(社)東洋音楽学会関西支部
 〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付